



「ひらほく新聞」で検索!

★感謝で10年目突入 114号★

<http://www.hirahoku.com/>

☆ぜひ、バックナンバーをどうぞ!

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807



1,500円+税

有難いご縁をいただいている、七田式教育の七田厚代表より、ご本人の新著『お父さんのための子育ての教科書』が届きました。幼児教育で世界19の国と地域に広がり、60年の実績を持つ七田式教育の代表が、自身の育児体験を基に語り尽くした「子育てのヒント」。「子育ては親育て」、身近に子育て家族がいらつしやうなくても、大切な学び、教えをぜひお受け取りください。

はじめに

子育ては、本当に大変ですが、わが子が日々成長し、一人の人間として頼もしくなっていく姿を見るのは、親にとって最高の幸せです。そして、育児は「育自」でもあり、子供によって私たち親も成長していくことができます。

平成になってイクメンという語が生まれたように、積極的に子育てをする男性が増えてきたものの、慣れない育児で子供との接し方がわからず悩むお父さんも少なくないようです。そんなお父さんたちにも子育てを楽しんでいただけるように、イクメンの先輩である私なり、「父親ができる子育て学」を紹介しようというのが本書の目的です。おっぱいをあげられて、いつも子供に寄り添い、こまやかな愛情をかけられるのは、お母さんの得意分野でしょう。

しかし逆に、「父親にできない育児」というものがあります。まず、お父さんの育児は、

「量より質」です。

家族を養うための大切な仕事で子供が起きる前に出勤、帰宅は深夜という方もいらつしやるでしょうが、一緒に過ごせるときには、子供の思い出に残るような過ごし方を工夫してみてください。難しく考えることはなく、日常のなかに小さなドラマをつくれればいいのです。

それから、もう一つ、父親だからこそできる重要な子育てがあります。

それは、「子供の心に残るエールを送る」ということです。

子供はいつか必ず親元を離れ、自分だけの力で生きていかなければなりません。その後の人生で迷ったとき、悩んだとき、壁にぶ

つかったときに生きる力になるような励まし言葉、子供にかけてあげるように心がけてほしいのです。

子供は無限の可能性をもった才能のかたまりです。その才能が開花するような環境づくりをすること……これが子育てで重要な点だということ

です。これはお父さんだけでなく、もちろんお母さんも、そしておじいちゃんもおばあちゃんも、ぜひ心がけてください。

「蛙の子は蛙」ではありません。環境次第、育て方次第で一流の人物になり得るのです。そのポイントは、

0歳から小学校低学年までどのような環境で育てたかにあるのです。だいたいその期間に、子供の性格、資質、才能はほぼ決まってしまうからです。

でも、「うちは高学年だからもう遅い」とがっかりしないでください。愛を込めて育てれば、子育てに遅すぎるといふことはありません。勉強よりも愛が先、愛が大事。これが七田家の教育方針です。親の愛をしっかりと伝えることができれば、結果として賢い子供に育ちます。つまり、誰でも

いつでも、素質や才能を伸ばす子育てを始めることができます。

◎子供の視野や世界を広げる遊びをする

幼少期の子供は好奇心のかたまりです。興味を持ったものに対しては探究心がムクムクとふくらんで、驚くべき集中力で取り組み、能力を開花させていきます。

将棋棋士の藤井聡太さんは5歳で将棋教室に入会したとき、まだ読み書きができませんにもかかわらず、師匠から渡された500ページ近くもある将棋の本を「符号」を頼りに読み進め、1年後には完全に理解し、記憶していたといいます。

子供がどのような世界に興味を示して夢中になるかは、誰にもわかりません。親が思ってもいない分野に興味を持ち、才能を開花させることも稀ではありません。お父さんがすべきことは、子供にいろいろな世界を体験させること。

そして、子供のなかに芽生えた「興味の種」を見逃さず、それを伸ばす手助けをすることです。

子供は本来に興味をもったことではなければ、夢中になりません。親が「こんなことに興味をもってほしい」「この分野で才能を伸ばしてほしい」と、勝手にルールを敷いて導こうとするのはよくありません。

◎子供のありのままを認めれば、自信に満ち、意欲的な子に育つ

子供は、認められ愛されていることをエネルギーに成長します。ですから、子供をいまのまま認めて受け入れ、どんなときも「あなたがそこにいるだけでパパとママは幸せだよ」と、言い続けながら子育てをすることが重要です。

子供をありのままに認めて受け入れるためには、二つのポイントを頭に留めておいてください。

一つ目は、わが子の能力を信じるということです。

子供は誰でも生まれながらにして素晴らしい可能性と能力をもっている「天才」です。成長に応じて個性が現れ、自分自身でその個性を伸ばしていくようになり、と個性を無視して、親が勝手な願望を押しつけた子育てをすると、子供が本来もっている可能性や能力が封じ込まれてしまうのです。

子供の無限の能力に全幅の信頼をおいて、明るくすすくと育つように愛情いっぱい育ててください。親が意識をそう切り替えれば、その瞬間から子供は変わり始めます。

二つ目は、基準を子供以外のところにおかない(他の子供と比較しない)ことです。

体の成長も知能面の成長も、一人ひとり違います。成長が早い子もゆっくりな子もいます。比べる基準を他の子供の成長においてわが子を見ると、どうしてもマイナスの部分に目が向いてしまいます。

比べてしまうのは、わが子の成長を案じる親心でも、子供は親の不安やストレスに敏感ですから、「お父さんとお母さんは私(ぼく)のことを駄目な子だと思っている」と感じ取ります。そうすると自己肯定感が失われ、自分に自信がもてなくなってしまうのです。

基準はあくまでもわが子自身におきましょう。1週間前にできなかったことが、今日できるようなことが、3日前と比べてこんなに伸びた……そういう見方をし、成長を素直に喜んで、その感動を子供に伝えてください。

子供は親、とりわけお父さんに認められることを本能的に望んでいます。お父さんが子供の存在をそのまま認めてあげると、子供は自信がつき、意欲的にいろいろなことに取り組んでいけるようになります。(おわり)

一切なりゆき

〜樹木希林のごとば〜

2018年9月15日に永眠された希林さん。その残された深い言葉たちを綴った書籍「一切なりゆき」は150万部を超えるベストセラーに。あの圧倒的な演技は、まさにすごい生き方から生まれた……。

以下、いくつか抜萃、ご紹介いたします。それぞれの心にしつかりと受けとっていただけたらと思います。

モノを持たない、買わないという生活は、いいですよ

靴も昔から、長靴を含めて3足と決めています。長靴は40年ほど前に業務用のものを買って履き続けていたんですが、先日、履いている時に中がちよつとしまってきてしまった。仕方なく出先で別の長靴を買ったので、一瞬だけ家に靴が4足ある状態になりましたけど(笑)。

洋服は、自分で買ったものはほとんどなくて、どなたからお古を譲っていたので、それを着やすいように自分で胸ポケットをつけてみたり、ちよつとリメイクして着ています。家具にしても同じ。どなたかが「もういらなくなった」と

いうものをいただいで使っています。

もともとケチだということもありまずけど、一度使いた始めたら、それをできるだけ活用して、最後まで使いつつ終了させたいんです。「始末」ですね。

先日、近所の方が引っ越しをする際に、家具を捨てていったんです。確かに古ぼけていたんですけど、昔の家具というのは素材がよくて造りもしっかりしているの、ちよつと直せば十分使える。その家具も自分で表面を塗り直して、今使っています。

モノを持たない、買わないという生活は、いいですよ。部屋がすっきりして、掃除も簡単。汚れちゃったけど、今は忙しいから掃除ができない、どうしよう……なんていうストレスもない。暮らしがシンプルだと、気持ちもいつもせいせいとしていられます。

(2015年7月)

人の人生に、人の命にどれだけ自分が多く添えるか

私は、人と添ってみるということは、絶対に人間には必要だと思っんです。それは子どもでなくても夫でなくてもお手伝いさんでも

親でもなんでもいい。人の人生に、人の命にどれだけ自分が多く添えるかという、その体験の豊かさ、いい役者かそうでないかというふうに思っんですよね。

その人の悲しみを自分のことのように悲しめる。離れていてもちゃんと苦しみ……。そういうことの数だと思っんですよ。

(1987年1月)

存在をそのままに、あるがままを認める

ま、(夫婦関係が)今は元に戻ったというか。最終的にこういうところに着地したことは、なかなかいい人生の閉じ方だと思います。それがやはり子どもに伝わり、孫にも伝わるだろうな、と。これま

のまま、戦ったまんまでいたんでは、ね……。長い戦いを経て、ここにたどり着いたときには老老介護ですけどね(笑)。

良かった、の一言で済むことじゃないの。人というのはこのように、受け取り方を変えれば、同じ人間がこういふふうになるんだというふうなことですよ。

「やさしくなった」って、自分で言ってるんですけど(笑)、やさしいというより、いたわるというか。む

しろ相手の気持ちに入っで、う〜ん、何て言っんだろ、理解したっていうかな。認めるというのかな。夫を認める。もちろん子どもも認める。存在をそのままに、あるがままを認めるってことかな。そうしたらずいぶん楽になりました。

(2009年1月)

つつましくて色っぽいというのが女の最高の色気

存在している姿が結構でございます。という遠慮ではなくて、ほつという立ち姿でも恥ずかしくなるといふ、その感じがわかったときに女っていうのは非常に色っぽいんじゃないかと

思いますね。まず、それが男と対したときに色っぽいですよ。色っぽいというのは、バラの花をくわえて髪の毛をかき分けるしぐさとか、極端に言えばしどけないのが色っぽいというのではないかと、つつましくて色っぽいというのが女の最高の色気だと思います。

(1987年1月)

「やさしくなった」って、自分で言ってるんですけど(笑)、やさしいというより、いたわるというか。むしろ相手の気持ちに入っで、う〜ん、何て言っんだろ、理解したっていうかな。認めるというのかな。夫を認める。もちろん子どもも認める。存在をそのままに、あるがままを認めるってことかな。そうしたらずいぶん楽になりました。

日本新聞協会主催
第26回新聞配達に関する
エッセーコンテスト
大学生・社会人部門
「審査員特別賞」

「届いた声」
佐々木美和(34歳)

毎朝玄関の前に立っっているおじさんがいる。あいさつしてもみけんにシワを寄せ口をつぐんだまま。次の日も「明日は休刊日です」と新聞を差し出すと、無言で取り上げ、玄関に戻って行く。

半年たった頃、おじさんがいなくなつた。ポストに入ると玄関からおばさんが出てきた。「あなたが毎日、新聞を届けてくれる子ね。主人は新聞が来るのを楽しみにしてたのよ。実はどのがんでお話ができなかったの。耳もほぼ聞こえなくなつて。毎日、新聞と私しか相手が居なかつたから。でもいつしかあなたが来るのを待ってたわ。1時間も前から何度外に出て行ったり来たり。最近具合が悪くて入院してるのよ。これからはポストに入れてちょうだい」

それから半年後、おじさんが立っていた。「おはようございます。お久しぶりです」。おじさんがいつものように顔を凝視し、受け取った。でも玄関に入るときに笑顔が見えた。私の声も届いた気がした。(おわり)

池上彰さんの選評
いつも無言で無愛想に見えるおじさんが、実は新聞の配達を心待ちにしていた。新聞は心も届けられるのだ。

編集後記

赤ちゃん、寝返りもハイハイも、つかまり立ちも歩くことも、失敗して痛い思いをしても、できるまで絶対にあきらめない。だが物心ついてから、一番に信頼する親や回りの大人たちに「危ないから、無理だから、できないから……やめなさい」というような言葉や、挑戦を止めてしまうようになる。無限の可能性を持った才能のかたまりの子どもたち。そのままに成長していきけるように、身近な大人たちの環境づくり、接し方を願う。

11月24日、東京国立博物館にて御即位祈念特別展「正倉院の世界〜皇室がまもり伝えた美」を有難く鑑賞。最終日午後でかなり混雑していたが、音声ガイドも借りて閉館時間までじっくりと観ることができた。8世紀、奈良時代から1300年もの間、人々の手によって大切にまもり伝えられてきた数々の宝物たち。想像を超えたその保存状態に驚きの連続、そして更に感嘆したのは、長年続けられてきた調査、研究による現代の復元の技術。唐時代に作られたもので、おそらく遣唐使によって持ち帰られたのではないかとされる「螺鈿紫檀五絃琵琶」。その模造品が撮影可能な最終コーナーに展示されていた。



何と今年まで、延べ8年の歳月をかけて、何人もの現代の匠(職人)たちで創りあげたもの。その再現作業の映像を観て、とにかく感動しきりだった。いにしえより奇跡的に紡がれた歴史、「夢の国・日本」に生まれた幸せを実感した。

令和の徳仁天皇陛下の祈りの力は絶大、とある書籍で読んだ。厳かに執り行われた大嘗祭で五穀豊穡と国家安寧をお祈りいただいた。国民に寄り添う象徴としてのお姿を有難くいただきます、新年令和2年へ向かう。

